The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 感情表出抑制の対人的効果 |
| Author(s) | 阿部, 晋吾; 高木, 修 |
| Citation | 対人社会心理学研究. 2006, 6, p. 23-29 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/4670 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 感情表出抑制の対人的効果[1)]

阿部晋吾(関西大学社会学部[2)])
高木　修(関西大学社会学部)

本研究では、大学生および大学院生 162 名を対象に、感情表出を抑制する個人が、受け手からどのような動機を推測され、どのような印象や評価を受けるのかを質問紙調査によって検討した。その結果、ポジティブな感情表出の抑制による対人的効果は受け手の感情状態に大きく左右されることが明らかとなった。また、ネガティブな感情表出の抑制は、受け手がポジティブな感情状態であるときは他者志向的な動機を推測されやすく、全般的な印象も良くなるが、それと同時に快活さに欠けると判断されやすく、関係評価はあまり高まらないことが明らかとなった。

キーワード: 感情表出の抑制、対人的効果、動機の推測、印象形成

## 問 題

われわれは社会生活を営む際に、経験した感情をそのまま表さず、強めたり、弱めたり、他の感情に置き換えたりして、本来とは異なる形にして表すことがあるが、これを感情表出の制御という(崔・新井, 1997, 1998)。本研究では、感情表出の制御の中でも、実際には感じている感情を表出しない、すなわち感情表出の抑制に焦点を当て、その対人的効果について検討する。我々は日常生活の中で感情を抑制することは少なくないが、これは、他者との関係を良好に保つために、あるいは、自分に対する他者からの評価をマイナスにしないために必要だからである(平林, 1993a)。

しかし、感情を抑制することによって生じる影響は肯定的なものばかりではない。Gross & John(2003)は感情表出の抑制がストレス反応を高めることを明らかにしている。また、崔・新井(1998)では、感情表出の抑制が、自尊感情を低くし、抑うつ傾向を高めることが示唆されている。林・瀧本(2000)においても、過度に感情表出の乏しい場合には、抑うつ傾向の高まることが示唆されている。このようなことから、感情を過度に抑制することは、自身の精神的健康において望ましくないことがいくつかの研究で明らかになっている。

また、感情の抑制が対人関係に否定的な影響を及ぼすこともある。Butler, Egloff, Wilhelm, Smith, Erickson, & Gross(2003)は、二者間でのコミュニケーションにおいて感情表出を抑制することで、相手から否定的な評価を受けやすくなることを実験室実験で明らかにしている。さらに、こうした評価には、感情表出を抑制する際の動機の推測が媒介していることを示す研究もいくつかみられる。繁桝・池田(2003)では、「その人とぶつかるくらいなら、言いたいことを言わない(Restraint on Negative Feedback: RNF)」というコミュニケーションスタイルをとられていると相手が推測した場合、他者志向と明確性志向を低く推測されると、関係評価が低くなることが示唆されている。すなわち、相手のためを思って感情を抑制しているのではないと判断されたり、明確に伝えることが重視されていないと判断されたりすると、RNF による対人的効果は否定的になることが示された。また、平林(1993b)によると、一般に、感情表出を抑制する個人に対する評価は肯定的で、抑制しない人に対する評価は否定的なものであるが、感情表出を抑制する目的(動機)が異なると対人評価や感情も変化することが示唆されている。つまり、相手の配慮などの向社会的な動機で感情表出を抑制する者に対する評価は高いが、自尊心の維持などの自己保護的な動機で感情表出を抑制する者に対する評価は低いことが示唆されている。これらの研究結果より、受け手が感情表出を抑制する個人を評価するとき、抑制した動機を、他者志向的なものととらえるか、自己志向なものととらえるかが重要であることがわかる。

しかし、平林(1993b)の研究では、実際に対象者がどのような動機を推測したのかということについては扱われていない。提示した場面の内容から、対象者がどのような動機を推測していたかを判断したに留まる。したがって、どのような状況のときに、どのような動機を推測するのかについても実証的に検討していく必要がある。

では、動機の推測にはどのような要因が影響を及ぼすのであろうか。まず、抑制する感情の種類が考えられる。平林(1993b)では、ポジティブな感情表出を抑制しようとする場面とネガティブな感情表出を抑制しようとする場面に分けられているが、本研究でもポジティブな感情として「喜び」、ネガティブな感情として「悲しみ」を用い、それぞれの影響を検討する。

また、感情表出の抑制が行なわれるときの受け手の感情状態も重要な要因であると考えられる。一般的に、受け手と正反対の感情を持っているときは、相手のポジティブな感情が損なわれたり、ネガティブな感情を刺激したりしないように、相手の感情に配慮して感情表出を抑制することが多い。したがって、このような状況での抑制は、受け手から他者志向的な動機によるものと推測されやすいだろう。反対に、受け手と同じ感情状態である場合に感情表出を抑制する場合、その理由は相手の感情への配慮というよりも、恥ずかしさによる自己開示の拒否や、自分が望まない印象が形成されることへの懸念からなされることが多いと考えられる。したがって、このような状況で表出を抑制するのは自己志向的な動機によるものと判断されやすくなるだろう。

さらに、こうした状況が印象や関係評価にどのような影響を及ぼすかについても検討する。平林(1993b)で示唆されているように、他者志向的な動機の推測されやすい状況では、肯定的な印象が形成されやすく、また関係評価も肯定的になる一方で、自己志向的な動機の推測されやすい状況では、その反対の結果が予測される。

**仮説** 1) 相手とは反対の感情を抱いている場合の感情表出の抑制は、他者志向的な動機を推測されやすいだろう。

2)相手との感情が同じである場合の感情表出の抑制は、自己志向的な動機を推測されやすいだろう。

3)感情表出の抑制に対して他者志向的な動機を推測しやすい状況では、相手の印象が良く、関係の評価も高くなるが、自己志向的な動機を推測しやすい状況では、相手の印象が悪く、関係の評価も低くなるだろう。

## 方 法

**調査対象者と実施方法** 2003年11月26日から12月3日の間に、大学生および大学院生162名(男性81名、女性81名。年齢 $M$ =20.45, $SD$ =1.49)を対象に調査を実施した。質問紙は個別に配布し、その場で回収した。

1 人の対象者に対し、1 つの仮想場面を提示した質問紙を無作為に配布した。仮想場面に登場する「友人」には、同性で、最も親しい実在する友人を 1 人当てはめた上で、対象者自身がその場面に直面していることを想定しながら読み、その後の質問に回答するように文章で教示した。

**質問項目** 1)フェース項目：性別、年齢、学年についてそれぞれ尋ねた。

2)場面の提示：自分の感情がポジティブかネガティブか、相手の感情がポジティブかネガティブかを組み合わせて4場面を設定した。

場面 1(自己感情ポジティブ・相手感情ポジティブ)：「あなたは、いいことがあって、とても上機嫌です。友人もまた、いいことがあって、とても上機嫌なのですが、友人は、そのとても気分がいいことを、あなたに隠そうとしました。」

場面 2(自己感情ポジティブ・相手感情ネガティブ)：「あなたは、いいことがあって、とても上機嫌です。一方、友人は、悲しいことがあって、とても落ち込んでいるのですが、そのとても落ち込んでいる気持ちを、あなたに隠そうとしました。」

場面 3 (自己感情ネガティブ・相手感情ネガティブ)：「あなたは、悲しいことがあって、とても落ち込んでいます。一方、友人は、いいことがあって、とても上機嫌なのですが、そのとても気分がいいことを、あなたに隠そうとしました。」

場面 4(自己感情ネガティブ・相手感情ネガティブ)：「あなたは、悲しいことがあって、とても落ち込んでいます。友人もまた、悲しいことがあって、とても落ち込んでいるのですが、友人は、そのとても落ち込んでいる気持ちを、あなたに隠そうとしました。」

3)動機推測の尺度：崔・新井(1998)と繁桝・池田(2003)を参考に 8 項目を作成した(Table1 参照)。「他者志向」に該当すると考えられる 4 項目と、「自己志向」に該当すると考えられる 4 項目とから成る。「全く当てはまらない(1 点)」から「よく当てはまる(5 点)」までの 5 件法で尋ねた。

4)印象の尺度：林(1978)の一連の研究で開発された 20 項目からなる特性形容詞尺度を使用した(Table2 参照)。林による多くの研究から「個人的親しみやすさ」「社会的望ましさ」「活動性(力本性)」に該当する各因子が抽出されている。SD 法形式の 7 段階評定であった。

5)関係評価の尺度：内田(1990)と繁桝・池田(2003)を参考に 10 項目を作成した(Table3 参照)。「全く当てはまらない(1 点)」から「よく当てはまる(5 点)」までの 5 件法で尋ねた。

## 結 果

**尺度の構造解明** 動機推測、印象、関係評価の書く尺度について、その構造を明らかにするために、それぞれ因子分析(主因子法、因子が複数の場合はプロマックス回転)を行った(Table 1～3)。その結果、スクリープロット、因子負荷量などから総合的に判断して、動機推測は 2 因子、印象は 2 因子、関係評価は 1 因子を抽出した。

動機推測の 2 因子については、第1因子には、「あなたの気を悪くするようなことはさけるため」などが高く負荷していることから、「他者志向的動機推測」と命名した。一方、第 2 因子には「自分の気持ちを気にかけてもらいたいから」などが高く負荷していることから、「自己志向的動機推測」と命名した。印象の 2 因子については、第1因子には、「人のわるい」「不親切」など、全般的に否定的な形容詞の方向に負荷していることから、「否定的印象」 と命名し

た。第 2 因子には「自信のある」「意欲的な」などが高く負荷していることから、「快活さ」と命名した。なお、「ひとなつっこい-近づきがたい」「軽率な-慎重な」「恥ししらずの-恥ずかしがりの」「堂々とした-卑屈な」「親しみやすい-親しみにくい」の 5 項目は、両因子に絶対値で.40 以上の高い負荷量がみられるか、もしくはいずれの因子にも絶対値で.40 以上の負荷がみられなかったために、分析から除外した。Table2 はこれらの項目を除外した上で、改めて因子分析を行った結果である。関係評価の因子には、「心から親友といえる」など肯定的な項目が高く負荷していることから、「肯定的関係評価」と命名した。

Table1 動機推測の因子パタン行列と平均値、標準偏差

| 項目 | *F1* | *F2* | *M (SD)* |
|---|---|---|---|
| ＜*F1*：他者志向的動機推測＞ | | | |
| あなたが気を悪くするようなことはさけるため | 0.70 | 0.04 | 3.49 (1.25) |
| あなたに負担をかけないように | 0.66 | −0.09 | 3.52 (1.33) |
| あなたの気持ちを共有するため | 0.54 | 0.15 | 2.93 (1.28) |
| あなたと深い付き合いをしたいから | 0.49 | −0.01 | 2.87 (1.22) |
| ＜*F2*：自己志向的動機推測＞ | | | |
| あなたに自分の気持ちを気にかけてもらいたいから | 0.29 | 0.66 | 2.37 (1.07) |
| 浅い付き合いにとどめておきたいから | −0.10 | 0.52 | 2.10 (1.01) |
| 照れくさいから | −0.05 | 0.44 | 2.73 (1.41) |
| 自分のことだけを考えているから | −0.33 | 0.44 | 2.19 (1.10) |
| 因子寄与（二乗和） | 1.66 | 1.12 | |

Table2 印象の因子パタン行列と平均値、標準偏差

| 項目 | *F1* | *F2* | *M (SD)* |
|---|---|---|---|
| ＜*F1*：否定的印象＞ | | | |
| 人のわるい－人のよい | −0.86 | 0.00 | 4.69 (1.23) |
| 不親切な－親切な | −0.75 | 0.10 | 4.56 (1.29) |
| 感じのわるい－感じのよい | −0.68 | 0.11 | 4.21 (1.28) |
| 分別のある－無分別な | 0.67 | 0.14 | 3.17 (1.23) |
| 心のひろい－心のせまい | 0.66 | −0.16 | 3.62 (1.37) |
| 重厚な－軽薄な | 0.65 | 0.18 | 3.33 (1.14) |
| なまいきでない－なまいきな | 0.57 | 0.06 | 3.08 (1.36) |
| 気長な－短気な | 0.55 | 0.12 | 3.40 (1.01) |
| 責任感のある－責任感のない | 0.54 | 0.02 | 3.52 (0.99) |
| にくらしい－かわいらしい | −0.49 | −0.03 | 4.39 (1.24) |
| ＜*F2*：快活さ＞ | | | |
| 自信のない－自信のある | 0.21 | 0.73 | 3.61 (1.18) |
| 無気力な－意欲的な | −0.07 | 0.57 | 3.90 (0.89) |
| 積極的な－消極的な | 0.06 | −0.54 | 4.57 (1.00) |
| 沈んだ－うきうきした | 0.19 | 0.53 | 3.49 (1.34) |
| 非社交的な－社交的な | −0.38 | 0.44 | 3.90 (1.26) |
| 因子寄与（二乗和） | 4.44 | 1.75 | |

Table3 関係評価の因子負荷行列と平均値、標準偏差

| 項目 | *F1* | *M (SD)* |
|---|---|---|
| ＜*F1*：肯定的関係評価＞ | | |
| 心から親友といえる | 0.81 | 2.94 (1.15) |
| 十分に受け入れられていると感じる | 0.80 | 2.88 (1.10) |
| とても気持ちが通いあっていると感じる | 0.80 | 2.77 (1.08) |
| この友人とは今後も親しくなっていくと思う | 0.76 | 3.52 (1.12) |
| この友人は私を本当に理解してくれていない | −0.75 | 2.58 (1.06) |
| この友人には心からうちとけて話ができない | −0.74 | 2.74 (1.14) |
| この友人との関係はずっと続いていくと思う | 0.74 | 3.62 (1.05) |
| その場はうまくやっていけるが気持ちが通じあっていないと感じる | −0.66 | 2.84 (1.14) |
| この友人との関係に不満を感じる | −0.66 | 2.67 (1.24) |
| この友人の期待にこたえようと思っている | 0.61 | 3.33 (1.05) |
| 固有値 | 5.87 | |

**場面が動機推測に及ぼす影響**　場面によって、動機の推測に違いがみられるかどうかを検討するために、場面を独立変数、「他者志向的動機推測」、「自己志向的動機推測」の因子得点をそれぞれ従属変数とした、2(自己感情のポジティブ・ネガティブ)×2(相手感情のポジティブ・ネガティブ)の 2 要因の分散分析を行った(Figure1 参照)。

まず他者志向的動機推測を従属変数とした場合には、自己感情の主効果($F$ (1, 158)=12.36, $p$ <.001)が有意であった。すなわち、自分の感情がポジティブなとき（$M$ =-.20, $SD$ =.83)よりもネガティブなとき($M$ =.20, $SD$ =.86)の方が、他者志向的動機が推測されやすかった。また、自己感情と相手感情の交互作用($F$ (1,158)=44.26, $p$ <.001)も有意であった。単純主効果の検定の結果、自己感情がポジティブなときの、相手感情の単純主効果($F$ (1, 158)=30.49, $p$ <.001)と、自己感情がネガティブなときの、相手の感情の単純主効果($F$ (1, 158)=15.18, $p$ <.001)が有意であった。また、相手感情がポジティブなときの、自己感情の単純主効果($F$ (1, 158)=51.09, $p$ <.001)と、相手感情がネガティブなときの、自己感情の単純主効果($F$ (1, 158)=4.98, $p$ <.05)が有意であった。すなわち、自分の感情がポジティブなときは、相手の感情がポジティブなとき($M$ =-.67, $SD$ =.70)よりもネガティブなとき($M$ =.25, $SD$ =.69)の方が、自分の感情がネガティブなときは、相手の感情がネガティブなとき($M$ =-.12, $SD$ =.76)よりもポジティブなとき($M$ =.53, $SD$ =.83)の方が、他者志向的動機が推測されやすかった。また、相手の感情がポジティブなときは、自分の感情がポジティブなとき($M$ =-.67, $SD$ =.70)よりもネガティブなとき($M$ =.53, $SD$ =.83)の方が、相手の感情がネガティブなときは、自分の感情がネガティブなとき($M$ =-.12, $SD$ =.76)よりもポジティブなとき($M$ =.25, $SD$ =.69)の方が、他者志向的動機が推測されやすかった。

次に、自己志向的動機推測を従属変数とした場合は、自己感情の主効果($F$ (1, 158)=10.13, $p$ <.01)が有意であった。すなわち、自分の感情がネガティブなとき（$M$ =-.17, $SD$ =.78)よりもポジティブなとき($M$ =.17, $SD$ =.81)の方が、自己志向的動機が推測されやすかった。また、自己感情と相手感情の交互作用($F$ (1, 158)=50.38, $p$ <.001)も有意であった。単純主効果の検定の結果、自己感情がポジティブなときの、相手感情の単純主効果($F$ (1, 158)=26.32, $p$ <.001)と、自己感情がネガティブなときの、相手の感情の単純主効果($F$ (1, 158)=24.10, $p$ <.001)が有意であった。また、相手感情がポジティブなときの、自己感情の単純主効果($F$ (1, 158)=52.21, $p$ <.001)と、相手感情がネガティブなときの、自己感情の単純主効果($F$ (1, 158)=7.76, $p$ <.01)が有意であった。す

なわち、自分の感情がポジティブなときは、相手の感情がネガティブなとき($M$ =-.22, $SD$ =.61)よりもポジティブなとき($M$ =.57, $SD$ =.69)の方が、自分の感情がネガティブなときは、相手の感情がポジティブなとき($M$ =-.55, $SD$ =.67)よりもネガティブなとき($M$ =.21, $SD$ =.70)の方が、自己志向的動機が推測されやすかった。また、相手の感情がポジティブなときは、自分の感情がネガティブなとき($M$ =-.55, $SD$ =.67)よりもポジティブなとき($M$ =.57, $SD$ =.69)の方が、相手の感情がネガティブなときは、自分の感情がポジティブなとき($M$ =-.22, $SD$ =.61)よりもネガティブなとき($M$ =.21, $SD$ =.70)の方が、自己志向的動機が推測されやすかった。

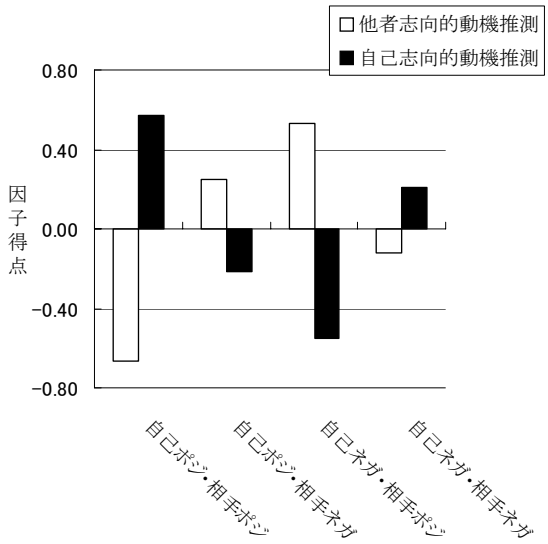


Figure1 各場面での動機推測の平均値

**場面が印象に及ぼす影響** 場面によって、相手の印象に違いがみられるかどうかを検討するために、場面を独立変数、「否定的印象」「快活さ」の因子得点をそれぞれ従属変数とした、2(自己感情のポジティブ・ネガティブ)×2(相手感情のポジティブ・ネガティブ)の 2 要因の分散分析を行った(Figure2 参照)。

否定的印象を従属変数とした場合には、自己感情と相手感情の主効果はみられなかったが、自己感情と相手感情の交互作用($F$ (1, 158)=37.67, $p$ <.001)が有意であった。単純主効果の検定の結果、自己感情がポジティブなときの、相手感情の単純主効果($F$ (1, 158)=23.90, $p$ <.001)と、自己感情がネガティブなときの、相手の感情の単純主効果($F$ (1, 158)=14.43, $p$ <.001)が有意であった。また、相手感情がポジティブなときの、自己感情の単純主効果($F$ (1, 158)=20.27, $p$ <.001)と、相手感情がネガティブなときの、自己感情の単純主効果($F$ (1, 158)=17.44, $p$ <.001)が有意であった。すなわち、自分の感情がポジティブなときは、相手の感情がネガティブなとき($M$ =-.44, $SD$ =.79)よりもポジティブなとき($M$ =.49, $SD$ =.99)の方が、自分の感情がネガティブなときは、相手の感情がポジティブなとき($M$ =-.38, $SD$ =.84)よりもネガティブなとき($M$ =.35, $SD$ =.82)の方が、否定的印象が形成されやすかった。また、相手の感情がポジティブなときは、自分の感情がネガティブなとき($M$ =-.38, $SD$ =.84)よりもポジティブなとき($M$ =.49, $SD$ =.99)の方が、相手の感情がネガティブなときは、自分の感情がポジティブなとき($M$ =-.44, $SD$ =.79)よりもネガティブなとき($M$ =.35, $SD$ =.82)の方が、否定的印象が形成されやすかった。

快活さを従属変数とした場合は、相手感情の主効果($F$ (1, 158)=38.50, $p$ <.001)が有意であった。すなわち、相手の感情がネガティブなとき ($M$ =-.37, $SD$ =.79)よりもポジティブなとき($M$ =.38, $SD$ =.77)の方が、快活さが高く評価されやすかった。自己感情の主効果、および自己感情と相手感情の交互作用効果は有意でなかった。

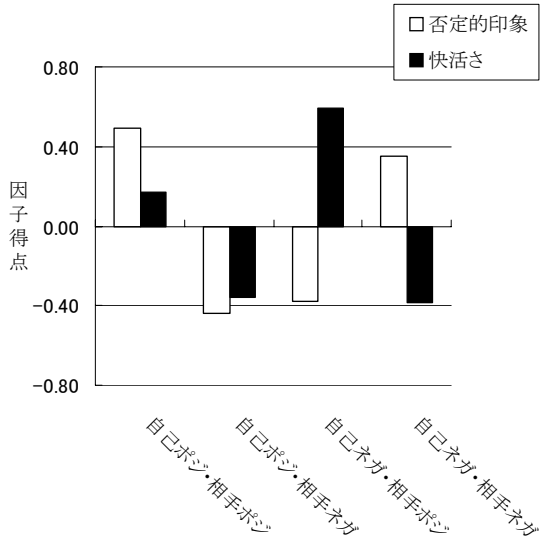


Figure2 各場面での印象の平均値

**場面が関係評価に及ぼす影響** 場面によって、相手の印象に違いがみられるかどうかを検討するために、場面を独立変数、「肯定的関係評価」の因子得点を従属変数とした、2(自己感情のポジティブ・ネガティブ)×2(相手感情のポジティブ・ネガティブ)の 2 要因の分散分析を行った(Figure3 参照)。

その結果、自己感情の主効果($F$ (1, 158)=4.41, $p$ <.05)が有意であった。すなわち、自分の感情がポジティブなとき ($M$ =-.15, $SD$ =.94)よりもネガティブなとき($M$ =.15, $SD$ =.96)の方が、肯定的関係評価が高くなりやすかった。また、自己感情と相手感情の交互作用($F$ (1)=33.823, $p$ <.001)も有意であった。単純主効果の検

定の結果、自己感情がネガティブなときの、相手感情の単純主効果($F$ (1, 158)=9.87, $p$ <.01)がみられた。すなわち、自分の感情がネガティブなときは、相手の感情がネガティブなとき($M$ =-.17, $SD$ =.15)よりもポジティブなとき($M$ =.48, $SD$ =.15)の方が、肯定的な関係評価がなされやすいが、自分の感情がポジティブなときは、相手感情のポジティブ($M$ =-.26, $SD$ =.15)、ネガティブ($M$ =-.04, $SD$ =.14)による差はみられなかった。

また、相手感情がポジティブなときの、自己感情の単純主効果($F$ (1, 158)=12.76, $p$ <.001)もみられた。すなわち、相手の感情がポジティブなときは、自分の感情がポジティブなとき($M$ =-.26, $SD$ =.15)よりもネガティブなとき($M$ =.48, $SD$ =.15)の方が、肯定的な関係評価がなされやすいが、相手の感情がネガティブなときは、自己感情のポジティブ($M$ =-.04, $SD$ =.14)、ネガティブ($M$ =-.17, $SD$ =.15)による差はみられなかった。

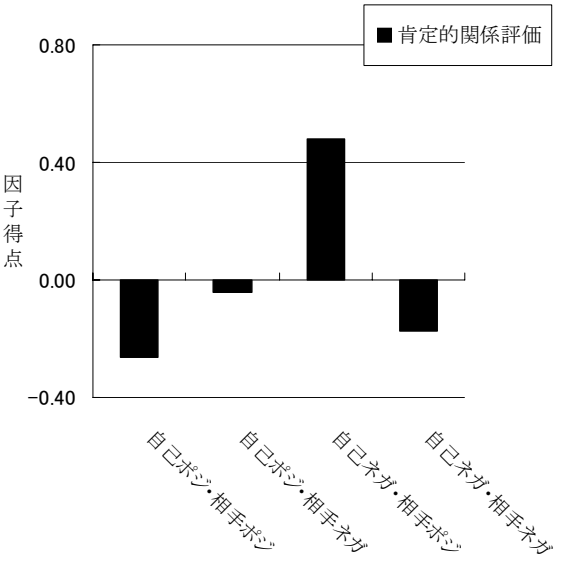


Figure3 各場面での関係評価の平均値

**動機推測、印象、関係評価の関連性** 従属変数間の関連性を検討するために、動機推測、印象、関係評価の各因子得点の相関行列を Table4 に示す。

Table4 動機推測、印象、関係評価の相関

| | 他者志向的動機推測 | 自己志向的動機推測 | 否定的印象 | 快活さ | 肯定的関係評価 |
|---|---|---|---|---|---|
| 他者志向的動機推測 | 1.00 | −0.60 ** | −0.52 ** | 0.06 | 0.40 ** |
| 自己志向的動機推測 | | 1.00 | 0.54 ** | −0.18 * | −0.48 ** |
| 否定的印象 | | | 1.00 | −0.28 ** | −0.60 ** |
| 快活さ | | | | 1.00 | 0.48 ** |
| 肯定的関係評価 | | | | | 1.00 |

*$p$<.05, **$p$<.01

他者志向的動機推測は、自己志向的動機推測とは-.60、否定的印象とは-.52 の有意な負の相関がみられた。また、肯定的評価とは.40 の正の相関がみられた。一方、自己志向的動機推測は、否定的印象と.54 の正の相関がみられ、快活さ、肯定的関係評価とはそれぞれ-.18、-.48 の負の相関がみられた。さらに、否定的印象は快活さ、肯定的評価との間にそれぞれ-.28、-.60 の負の相関が見られ、快活さと肯定的評価の間には.48 の正の相関がみられた。

## 考 察

本研究の結果より、表出を抑制する側の感情（本研究では、「相手感情」）だけでなく、受け手側の感情（本研究では、「自己感情」）も対人的効果に重要な影響を与えていることが明らかとなった。

まず、動機の推測において自己感情の主効果がみられたとおり、受け手側の感情がネガティブな場合は、ポジティブな場合に比べ感情表出の抑制は受け手から他者志向的動機を推測されやすく、自己志向的動機を推測されにくいことが明らかとなった。これは、ネガティブな感情状態の人に対しては、周囲の配慮が必要であるという社会的規範があるため、相手が何らかの感情表出を抑制すると、自分への気づかいを感じ、他者志向的動機を推測しやすいと同時に、自己志向的動機を推測しにくいためと考えられる。また、自己感情と相手感情の交互作用もみられ、仮説 1)、2)を支持する結果が得られた。すなわち、抑制側と受け手側の感情状態が異なる場合には他者志向的動機が推測されやすく、反対に抑制側と受け手側の感情状態が同じ場合には自己志向的動機が推測されやすいことが明らかとなった。自分の感情がネガティブで相手の感情がポジティブなときは、自分のネガティブな感情を刺激しないように抑制してくれていると感じ、逆に自分の感情がポジティブで相手の感情がネガティブなときは、自分のポジティブな感情をネガティブな感情で害さないように気づかってくれていると感じるため、自分と相手の感情状態が同じ場合に比べ他者志向的動機を推測すると考えられる。一方、感情状態が同じ場合に表出を抑制すると、比較的他者に配慮する必要のない状況での抑制となるので、個人の内的な理由、すなわち自己志向的な動機が推測されやすくなるといえよう。

次に、印象への影響について考察する。否定的印象については、分散分析の結果より、抑制側と受け手側の感情状態が異なる場合よりも、同じ場合に形成されやすくなることが明らかとなった。これは他者志向的動機推測を従属変数とした場合とは正反対の結果であり、自己志向的動機推測を従属変数とした場合と同じ結果である。相関分析においても、否定的印象は他者志向的動機推測と強い負の相関がみられ、自己志向的動機との強い正の相関がみられた。一般的に、他者志向的な動機は社会

的にも望ましい、受け入れられやすい動機であり、自己志向的動機は「自分勝手」「わがまま」といった否定的にとらえられやすい動機であるので、このような結果が得られたと考えられる。したがって、印象に関しては、仮説 3)は支持されたといえよう。なお、本研究では印象のもう一つの側面として、「快活さ」という因子が得られたが、これについては相手感情の主効果のみがみられ、抑制側の感情がポジティブなときはネガティブな感情のときよりも快活さが高まるという結果がえられた。一般的に、ネガティブな感情を表出するのは親密な相手であることが多く、公共の場でなされることはあまりない。言い換えれば、ネガティブな感情表出は、ポジティブな感情表出よりも深い自己開示を意味すると考えられる。したがって、ポジティブな感情を抑えることよりもネガティブ感情を抑えることは、相手に対する自己開示の拒否を顕著に示すことになり、「自分に自信がないから」と判断されたり、「社交的でない」と判断されたりするので、快活さを低めてしまう可能性が考えられる。あるいは、もともとポジティブな感情状態という状況のため、快活さの評価が高まるとも考えられるが、これについては今後更なる検討が必要であろう。

一方、関係評価に関しては、仮説を支持する結果とはならなかった。すなわち、抑制側と受け手側が正反対の感情状態でも、抑制側がポジティブで受け手側がネガティブな感情のときでは、予測どおりと関係評価が高まったが、抑制側がネガティブで受け手側がポジティブな感情ときでは、予測に反して関係評価が高まらなかった。この原因として、相関分析でも明らかとなったように、快活さの影響がまず考えられる。ネガティブな感情表出を抑制すると快活さが低く評価されるため、相手との関係評価も低くなる可能性がある。また、もし自分であれば周囲のポジティブな感情表出は抑制してもらいたいネガティブな感情状態に相手がいるにもかかわらず、相手が表出を抑制しているために自分が相手の感情状態に気づかなければ、コミュニケーションが円滑に進まなくなる恐れがあるので、ネガティブな感情を抑制する相手に対しては、関係評価が低くなるのかもしれない。いずれにしても、この結果は当初の予測に反するものであるため、今後更なる検討が必要であろう。

以上の結果を全体的にまとめると、まず、ポジティブな感情表出の抑制による対人的効果は、受け手の感情状態に大きく左右されることが明らかとなった。そして、ネガティブな感情表出の抑制は、受け手がポジティブな感情を持っているときは他者志向的な動機を推測されやすく、全般的な印象も良くなるが、それと同時に快活さに欠けると判断されやすく、関係評価はあまり高まらないことが明らかとなった。

最後に、本研究の問題点と、今後の課題について述べる。最も大きな問題点は、本研究の結果は場面想定法によって得られたものであり、現実場面では異なる結果が得られる可能性があるということである。特に、感情表出の抑制は現実場面では気づかれないことも多いため、今後は現実場面での実験・観察を行うとともに、我々がどのような特徴から他者の感情抑制を読み取っているのかについての検討も必要であろう。

## 引用文献


Butler, E.A., Egloff, B., Wilhelm, F.H., Smith, N.C., Erickson, E.A., & Gross, J.J. 2003 The social consequences of expressive suppression. *Emotion*, 3, 48-67.

Gross, J.J., & John, O.P. 2003 Individual differences in two emotion regulation processes: Implications for affect, relationships, and well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 348-362.

林文俊 1978 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科) 25, 233-247.

林潔・瀧本孝雄 2000 抑うつ傾向と対人関係および情動表出様式についての検討と、Psycho-education の導入の可能性について マテシス・ウニウェルサリス(獨協大学外国語学部言語文化学科), 1, 497-511.

平林秀美 1993a 情動表出の制御に関する発達的研究の概観と展望 東京大学教育学部紀要, 33, 135-142.

平林秀美 1993b 感情表出のコントロールの差異が対人関係に及ぼす影響(2) 日本心理学会第 57 回大会発表論文集, 666.

崔京姫・新井邦二郎 1997 「感情の表出と制御」研究の概観 筑波大学心理学研究, 19, 29-35.

崔京姫・新井邦二郎 1998 ネガティブな感情表出の制御と友人関係の満足感および精神的健康との関係 教育心理学研究, 46, 432-441.

繁桝江里・池田謙一 2003 否定的フィードバック抑制における自己志向・他者志向・明確性志向:「言わないこと」が効果的な場合とは 日本社会心理学会第 44 回大会論文集, 160-161.

内田圭子 1990 青年の生活感情に関する一研究 教育心理学研究, 38, 117-125.


## 註

1)本論文は、第一、第二著者の指導のもと行われた、坂井愛氏(2003 年度関西大学社会学部卒業生)の卒業研

究のデータを再分析したものである。データを提供してくれた坂井氏に謝意を表する。

2)非常勤講師

# The Interpersonal Effects of the Restraint of Emotional Expression

Shingo Abe (*Faculty of Sociology, Kansai University*)
Osamu Takagi (*Faculty of Sociology, Kansai University*)

In this study, participants (162 students) responded to a questionnaire in order to examine how people infer the motive, and evaluate the relationship to individuals who restrain emotional expression. Results indicated that the interpersonal effects of the restraint of positive emotional expression were greatly influenced by the receiver's emotional state. On the other hand, the restraint of negative emotional expression caused the inference of the prosocial motive and the formation of the favorable impression when the receiver's emotional state was positive. However, without any relation to the receiver's emotional state, the restraint of negative emotional expression was likely to be considered "not lively", which caused the negative evaluation of the relationship.

Keywords: restraint of emotional expression, interpersonal effect, inference of motive, impression formation